

学んだことを家庭で実践

家庭と幼稚園・保育所をつなぐ 第14回

友だちと同じことをしたい〜まねて学ぶ〜

潮来保育所では、天気の良い日は1歳児から5歳児までが一緒に、園庭で好きな遊びを楽しんでいます。砂場や滑り台、ボールや追いかけてなど、その時の興味によって子ども自身が遊びを選択しています。

入所当初は、おうちのひとと離れた淋しさや不安から、涙が出ていた1歳児も、新しい環境に慣れたり、保育士との関係を築いたりすることで遊び出すようになります。

近くにある玩具に手を伸ばし、音や転がる様子に興味をもち触ってみます。慣れてくると好きな玩具を見つめ、繰り返し遊ぶようになります。一人遊びを十分に重ねると、いよいよ周りの友だちの様子が気になってきます。

ある日、それまで何日も座り込んで砂いじりに夢中になっていた子が、トコトコと歩き始めました。ちょうど歩行が安定してきて、行動範囲が広がってきた頃でもあり、友だちがいる一本橋でした。友だちが一本橋の上を砂を乗せていることに気が付いたのです。そばに座り込むと同じように砂を一本橋に乗せ始めました。大好きな砂の新しい遊び方に触れた瞬間でした。

「学ぶ」という言葉には、「見習う」という意味があります。



使わない玩具は片づけるんだね。



砂を乗せたら楽しいのかな？



足元に気を付けて。僕も一緒に滑りたい。



日の当たるところはあったかいな♪

潮来市立潮来保育所

す。見て、そのとおりにやってみて、覚える。まさにその場面でした。

ときには同じことをしたいがために、友だちの持っている玩具や道具を奪い、トラブルになることもあります。しかし、友だちの思いに気づいて我慢したり、「貸して」「いいよ」とやりとりしたりするチャンスでもあるんです。

子どもたちにとって、遊び全てが学びです。学びの効果は今すぐ出るものではありませんが、日々の小さな積み重ねが、その子の力につながっていきます。思いきり遊べる場、じっくり遊び込める時間を十分に確保してあげてください。そして一歩一歩成長していく子どもたちを温かく見守っていきましょう。

まちづくり・潮来の自然と歴史を知る

潮来市の誇れる自然

第39回

水郷の魚たちーごた煮干し

道の駅や市内の佃煮店には、ワカサギ、シラウオ、ゴロ（ハゼ類）、テナガエビなどの佃煮や煮干しがズラリと並んでいます。ほとんどが霞ヶ浦（西浦、北浦、外浪逆浦など）で漁獲され、地元で加工されたもの。霞ヶ浦の生態系の恵みを気軽に手に入れて味わえるのは、この地域ならではの魅力です。

都会から引越してきた人たちにとってナゾの食べ物「ごた煮干し」です。そもそも、「ごた」とは何か？お店の方に聞くと、「ごた煮」は「ごた煮」で、いろいろなものが入ったものとのこと。漁師さんが底引き網で採集した大量の魚・エビを、佃煮屋さんが職人技で種類を選別し加工する

のですが、小さ過ぎるものは手間がかかり選別しにくいそうです。そこで、小魚や小エビが混じった「ごた煮干し」が生まれたようです。食べ方は人それぞれですが、地元の料理名人に聞くと、野菜のかき揚げに混ぜると風味が際立ちますよ、とのこと。実際に、そうして食べると、やみつき的美味しさです。

「ごた」は霞ヶ浦の伝統食材です。明治・大正時代の帆引き網漁業の統計では主要漁獲物として計上されていました。最近の流通量はだいぶ少ないよう



写真1：霞ヶ浦産ごた煮干しに含まれていた小魚・小エビ
写真の上段は左からモツゴ、タモロコ、ワカサギ、シラウオ、ブルーギル
下段は左からハゼ科4種（ウキゴリ、アジシロハゼ、トウヨシノボリ、ヌマチチブ）とテナガエビ



写真2：ごた煮干しの観察に生徒たちが熱中！

です。この伝統食材の実態を把握しようと、霞ヶ浦周辺の12店舗で「ごた煮干し」を購入し、含まれている小魚・小エビ5万尾をひとつひとつ調べてみたところ、10種類も見つかりました（写真1）。お店によって種類の組成は微妙に異なり、これには漁場や製法の違いが関わっている可能性があります。最近、研究室では、霞ヶ浦の生きものや水産業について小学生が学ぶ教材として、ごた煮干しを活用しはじめています（写真2）。

茨城大学広域水圏環境科学
教育研究センター
加納光樹・関野遼